

五代目菊五郎自伝〈摘録〉 技芸の巻 十 いがみの権太

五代目 尾上菊五郎・述

伊坂梅雪・編

〈出典：「五代目菊五郎自伝」先進社、昭和4年2月〉

私の当り役の一つで東京は勿論、地方などへ参る時には必ず出物として居るのは『義経千本桜』の中のいがみの権太ですが、これは明治四年に私が書出しの位置で、中村座に出勤して居ります時分、十一月興行のとき初めて勤めたので、此時の役は暗闘の場で金毘羅参りの長吉と、此いがみの権太と義経に、浄瑠璃が『神有月色世話事』で飴売のかん子を勤めたので御座います。

一体いがみの権太は松本幸四郎が宜かったので、私は主にこの幸四郎の型を覚えて遣って居るのですが、此時には四代目（先代の菊五郎）が女房の小せんと、四の切りの静御前を勤めて居ったので御座います。木の実の場などの着付は、総て高麗屋（幸四郎）で遣って居りますが、次の鮎屋の場は私の思い付きなので、私は古い銘仙の女の着物を用いますが、それまでは主に紫縮緬の肩入れなどを着て居たものです。併しそれでは凄味が足りないのので、私は肩入れを止めて仕舞いました。それから兄貴（彦三郎）が三丁目の中村座で遣った時も矢張り此型で遣って居ましたが、見た様が善くなかったので御座います。それから小団次は悪かったので、私は常から小団次信仰で、始終小団次の部屋へ行って遊んで居りましたり、時としては後見に出て後ろで世話を致して居ましたが、高島屋（小団次）は木の実の場などは仮鬘はスイノウ張り（普通はムシリ）で白い脚絆を穿き、豎縞の引廻し合羽を着て居りました。例の、

『さあ無へぞ無へぞ、高野へ納める祠堂金……………』の処で、小金吾に悪口する処も、  
『それやア大和に沢山な万才か、才蔵ならば知らねえ』

が等と云って、小金吾が立って刀の柄へ手を掛けると、その床几が倒れてドンと権太が平舞台に腰を突いて、その檮床几で受けると云う趣向も余程面白いが、肝腎の形が善くない、それで評判が悪かったものですから、その後普通の型に改めたので御座います。それから幸四郎の遣りました権太の着付には口伝があると云うと大層難い様ですが、昔の役者は細かい事までに注意をして居ましたが、前にも云う如く此節の様に稽古が荒くてはそれまで凝って遣る事も出来ず、又凝って遣って居る者もないので、あの権太の鮎屋の場の二度目の白地に黒の弁慶縞は何うでも善いようなものですが、あれにちゃんと寸法が極って居るので、鯨尺で弁慶の角が豎一寸二分で、横が一寸なので御座います。之は未だ家橋等にも教えないのですが、今度は外のことで御座いませんから、お話をして書いて置いて、後来の役者の為に残して置いて遣りたいと思います。是れを横豎とも同じ寸法の弁慶にすると、真四角で着て居る者の形が悪う御座いますが、少しでも豎が長いと、すらりとして形が善く見えるので、いがみの権太の巾ったいのは余り見宜いものでは御座いません。それから三尺帯にも口伝があるので、木の実の場は二重廻りで御座いますが、鮎屋の

後は白木の三尺を<sup>ひとえまわ</sup>一重廻りに締めるのが幸四郎の型なのです。それから四の切り（四段目の切り）川連館の場の狐の狂いは小団次の型で遣って居るので御座います。